



空の箱庭



～伽藍庭園～

night-e-gets



——僕は眼球だけで浮遊している。

こんな風に言ってしまうと自分がまるで幽霊か何かのように思われるかもしれないけれど、実際そんなモノになってしまったのだから仕方がない。

勿論、本当に眼球が二つ宙に浮いているなんてことはない……と思う。多分。

けれど、少なくとも僕は、自分のことをそれに近い存在であると理解している。ほんの地上百六十数センチほどの高さから、僕は世界を観測し続けるのだ。

誰もいない、空(カラ)になった僕だけの箱庭を——



「——本当に突然だけど。僕『閨原漆麻(うるはらしづま)』は魔法使いだったのである」

……まあ、なんだろう。とりあえず、そんな壊滅的なことを言ってみたくなったのだ。唐突に。

「くくくっ」

ああ、口にしたら何だか愉快的な気持ちになってきた。昔では考えられないことだった。

僕は今、『魔法使い』なんて言ったけれど、多分それは間違っていると思う。しかし、だからといって僕が頭のおかしいやつだなんて思うのはやめて欲しい。こんな何気ない一言でそんな不名誉なレッテルを貼るなんて、脊髄反射もいいところだ。人間は考えることのできる生き物なのだから、もっとこう冷静で思慮深い態度を求めたい。

話を——いや、思考を戻そう。そうだ、確かに僕は魔法使いなんかではない。ただし、代わりと言ってはなんだけれど、ここ最近の僕はそんな魔法使い様などより余程凄いいし、強かったりする。それはもう、ラスボス戦には欠かせない隠しジョブをマスターした固有ユニット並に。対人戦ではチートとか反則とか散々言われて、僕を使ったプレイヤーは、軒並み友達から絶交を叩きつけられてしまうほどに。

本当に、それはそれは反則キャラなのだ、近頃の僕って奴は。

「あ……」

そんなことを考えて歩いていると、不意に前から歩いてきた誰かとぶつかった。高校二年生になっても平均より背が低かった僕は、肩が当たった程度で簡単に弾き飛ばされてしまう。

「チ……気をつけろ！！」

僕とぶつかった男は吐き捨てるようにそう言うと、彼のツレだろうか、友人と思しき二人と並んで歩いていった。いずれも似合いもしない長髪を茶や金に染め、耳には大胆にもピアスが開けられていた。客観的に見て、不良という種類の人間だろう。

ヘラヘラと下卑た嗤いが耳に障る。……それはそうと、今のは本当に僕が悪かったのだろうか？ 確かに僕は考え事をしていて注意が疎かになっていた。けれど、向こうだってこんなに狭い道をいっぱい広げて歩いているじゃないか。

「……ふん。まあいいさ。今日は機嫌がいいからね、許してあげるよ」

うん。傍から聞いたらどうしようもないくらいの負け惜しみかもしれないね。

でもそれは違う。皆はそう思うかもしれないが、僕だけはそれが負け惜しみじゃないことを知っている。笑いたかったら笑えばいい。

お、今のはなかなか大人の考え方だ——なんて思った矢先、今度は後ろから僕の名前を呼ぶ声がした。振り返ってみると倉瀬祭(くらせまつり)だった。

「おっはよー！ 朝から危ないところだったね。恐喝でもされるのかとワクワクしちゃったよ」

……それはビクビクの間違いだと信じたかった。

彼女を無視して、通学路である坂道上りを再開する。時刻はもうすぐ八時半になってしまう。四十分から始まる朝礼には遅刻したくないので、もたもたしてはいられない。

「ちょっと、無視しないでよ。……ところでさ、今日の数学の宿題やった？ あたし忘れちゃってさー」

早足で歩く中、昔からおしゃべりな彼女はやはり話を止めなかった。

彼女はいわゆる幼馴染というやつだ。世間的に幼馴染という響きはどこか聞こえのいいものらしいけれど、こと僕に関しては全くそうは思わない。話をする機会だって昔と比べれば年々減っていているし、きっと大学にでも進学すれば、お互いの接点は完全に消滅するだろう。そんな関係(もの)、離れれば疎遠になってしまう普通の友人関係と何が違う。

そんな彼女の話を適当な相槌を打ちながら、僕は一刻も早く教室に着くことを考えていたと思う。いつも朝礼にギリギリ間に合う時間に登校することを心掛けている僕だけれど、今朝は考え事にうつつを抜かしたり、よその不良生徒らしき連中にぶつかったりと散々なのだ。おまけに遅刻常習犯の倉瀬祭に出遭ってしまったことは、死亡(ちこく)フラグと言って差し支えなく、是が非でも叩き折りたい。

「——でね、もしよかったらノート貸して欲しいかなあ、なんて」

「……え、何？ ごめん、聞いてなかった」

早足のペースは崩さず、僕は彼女の話の聞いていなかったという事実を冷静に告げる。これもわりかしいつものことなので、特に罪悪感とか申し訳ない気持ちといったものは皆無だった。

「もう！ だから数学の宿題を見せてって話でしょ」

……今のはそんなに威張って言うことだろうか。とにかく僕のいい加減さを咎めてくる彼女。

「仕方ないじゃないか……だって、僕もまだやってない」

…

学校に到着した。ギリギリ遅刻は免れたものの、先生は既に教壇でスタンバイ状態だったので、気分的には遅刻も同然だった。うつむき気味に教室に入る僕。皆の視線が痛い。既に着席していた倉瀬祭(うらぎりもの)も、「ざまあみろ」なんて視線を送ってくる。何ていう薄情さだろう。あれで幼馴染みだなんて信じられない。ちくしょう、後で数学の課題を終わらせたら見せてやろうと思ったのに……もう絶対見せてやらないからな。

彼女はあの後、僕が数学の宿題をやっていないことが分かれると途端に駆け足で学校に向かってしまった。僕は走ることが苦手だったし、朝から走って汗をかくことに爽やかさより気持ち悪さを覚えてしまう人間だったため、必然的に彼女に置いていかれることになったのだ。まったくひどい話である。

僕は教室の静寂に配慮して、できるだけひっそりと自分の席を目指した。ちなみに僕の席は窓際の一番後ろ。つまり、先日の席替えでクラスで一番いいポジションを手に入れたのだった。毎年のクラス替えとか、そういった規模の大きな運は実はあまり良くないのだけれど、こういう小さな幸運なら僕程度でも掴めるらしい。

クラスメイトの視線に耐えながら、やや奥まった位置にある自分の席まで辿り着く。

「はい、では閏原君も来たところで朝礼を始めます」

起立、とどこからか号令の声が聞こえてきた。背筋の伸びるような、はきはきとした声だ。黒板を見ると、今日の日直は岸前(きしまえ)さんだった。

うちの学校の日直はあいうえお順で始まる出席番号順だ。号令も日直が行うことになっており、出席番号の若い僕が次に日直当番になるのは当分先になるだろう。そして、出席番号順でいくとそろそろ倉瀬祭の番が近い。今朝のことといい、雑用を言い換えただけの日直という面倒がもうすぐ彼女に降りかかることを思うと、僕は少しだけ溜飲が下がる心地だった。

「礼！」

周囲に倣って、皆と一緒に礼をする。着席の号令が聞こえると、僕は座っていつものように窓から外を眺めた。うちの学校は地元の街よりもいくらか高い場所に位置している。そのせいで自転車通学の生徒は毎朝ヒィヒィ言いながら登校しているらしいが、そのことと自分の教室が三階にあることが相まって、窓からの眺めはなかなか良好だった。

僕の席からは眼下のグラウンドは勿論、その遥か向こうにはまるで模型のように小さく見える街の様子が俯瞰できた。つまり授業に飽きたら外で体育をしている生徒や街を眺めるという現実逃避(ひまつぶし)が可能となり、成る程窓際とは競争率が高いわけである。そして、僕自身もそんな今の席が気に入っていた。

視線を教室に戻すと、先生はまだ自分たちに向けて何かを話しているようだった。おおよそ生活指導上の注意なのだろうが、恐らく熱心に耳を傾ける生徒は半分といまい。

そんな事を考えているうちに、僕はようやく、クラスの座席の三分の一ほどが空席であることを思い出した。

...

夕方のホームルーム。小学校でいえば『帰りの会』に相当する時間を、僕はやはり窓際最後尾の席で過ごしていた。

今日もいつもと変わらない一日だった。変わったことといえば、朝課題を忘れたと言っていた倉瀬祭がしっかりそれを提出していたこと（勿論僕が見せてあげたわけじゃない。そして僕の名誉のために言っておくと、別に本当に彼女に意地悪をしたわけではなくて、単純に僕が間に合わなかっただけだった。僕は女子に意地悪をする厭な奴になるくらいなら、課題を忘れた愚かな男であることを選ぶのだ）と、クラスの三分の一を占めていた空席が半分近くになっていたことくらい。しかし自分にとってはどちらもいつか見た光景だったので、総合すれば、やはり「いつも通り」という一言で収まる一日だったと思う。

「きりーつ」

日直だった岸前さんも、本日ついにクラスの空席に仲間入りをしてしまったので、代わりに僕が号令をかけた。昔はそんなことをする奴じゃなかったけど、日直がいなくなってしまったのだから仕方ない。それに今日は比較的気分がよかったことだし、たまには出しゃばって優等生を演じてみたかったのかもしれない。

「れーい」

僕の気の抜けた号令で皆が礼をする。礼の終わりに顔をあげると、皆どこか鼻白んだような、怪訝そうな表情で僕を見ていたけれど、僕は気にせず下校することにした。

...

——やや勾配の急な坂道を下りていく。授業(ノルマ)を終えた僕が帰る頃には、空は一面火事になったみたいな色をしていた。恐らくあと三十分もすれば火事を消し鎮める洪水のような夜が押し寄せてくるだろう。

家の前に着くとさすがに辺りは薄暗くなっており、家に灯る暖かな色が僕を迎えてくれた。

「ただいま」

「「ん、おかえり」」

入ってすぐのリビングにいた姉さんと母さんが、声をハモらせて言った。

姉さんは一人でソファに寝転んでテレビを見ている。そして食事の下準備は既に終わっているのか、今日は母さんまでテーブルに頬杖をついてぼんやりとテレビを眺めていた。チラリと視線をやると、ドラマの再放送のようだ。

「.....ねえ、鞆華(さやか)。それ面白いの？」

「分かんない。わたしも途中から見たから」

何とも生産性のない母と娘のやりとりを横目に、僕は自分の部屋に向かうことにする。台所の近くを通ると、匂いだけで料理名まで分かってしまうという『例の料理』のいい匂いが漂ってきて、くうとお腹が鳴った。

部屋に戻り明かりをつけるとベッドの上には僕の洋服が畳んで置かれており、洗濯を終えた母さんが持ってきてくれたのだと思った。朝はどこか埃っぽかったようなフローリングの床も心な

しかつやつやしており、これもやはり母さんがモップをかけてくれたのだろう。僕は母さんに感謝しながら、机に向かって学校の課題に取り掛かることにした。

課題を始めて暫く経つと、父さんが帰ってきて食事の時間になった。廊下に僕を呼びに来た姉さんの足音が聞こえたのを確認すると、それを合図に課題を切り上げ机のスタンドライトを消した。そしてほぼ同時に開かれる僕の部屋の扉。

「しづー、ご飯だよー」

勿論、今日もノックはなしだった。

...

「——おい漆麻。学校はどうだ」

食事時、父さんにしては珍しく僕に話を振ってきた。それも、恐らくはどこの家庭でも生涯十回くらいは口にし、また口にされるであろう、父から子への先制攻撃の常套句だった。

それに対して、僕もまた「別に普通」という伝説の切り返しをお見舞いしてやった。

「そうか？ いや、ここのところ明るい表情をしていることが多いから学校で何かいいことでもあったのかと思ったんだがなあ」

.....そうなのだろうか？僕は別段明るい表情をしていた覚えはないのだけれど、一番身近である家族の人間がそう言うのなら、あながち間違いでもないのだろうか。

とにかく、僕が食事時の父さんが話しかけてきたことに珍しさを感じたように、父さんも僕が明るい顔をすることが珍しいらしかった。

「.....そうかなあ。僕は普通にしてるつもりなんだけどなあ」

「いや、父さんには分かるぞ。昔は沈んだような表情ばかり見てきたからな。そうか、ようやく学校を楽しんでいると喜んでくれたのなら父さんも嬉しいぞ」

「だから普通だって。でも、確かに今期の席替えでは一番いい席を取れたんだ。それに関してはずごく嬉しいよ」

「なにに？好きな女の子の隣の席でもゲットしたの？」

「違うよ。クラスで窓際の一番後ろの席を取れたってだけ。——まったく、鞞華はすぐそういう話に持っていきたがるからなあ」

「なあんだ。つまらないのー」

気がつくと、母さんが僕たちのやりとりを見て微笑っていた。僕は、珍しく僕が父さんと話をしていることか、僕が姉さんにかかわれたことが原因だろうと考えた。そして、すぐにそのどちらもが母さんにとっては嬉しかったのだろうと気がつくと、何だか気恥ずかしくなって、大きめのお皿に盛られた『例の料理』にいそいそとスプーンを突っ込んだ。

例の料理とは、勿論あの有名なカレーライスのことだ。一見手軽と侮られがちなカレーだが、これが結構家庭においての差が顕著に出る。昔、幼馴染の倉瀬祭の家で夕飯をご馳走になった時に食べたのもカレーだった。彼女の家のカレーは水気の少ないドロツとした口当たりが印象的で、一方我が家は少しばかり水気の多いスープカレー風だ。どちらがいいか悪いかなんて僕には分からないけれど、僕にとっては馴染みの深い母さんのカレーがやはり好きだったと思う。

僕がカレーについて色々と思案を巡らせている最中に、今度は姉さんが、父さんと母さんに先

ほど見たばかりのドラマについて話を聞かせていた。二人の頭上には今にもはてなマークが浮かびそうだったが、姉さんが楽しそうだったのでとりあえず頷いているといった様子だった。

ドラマの話にまざれなかった僕は、黙々とカレーをスプーンで掬う作業を続けることにした。

...

今日も一日が終わる。自分の体温でいい具合に温まってきたベッドの中で、僕はそんな一日を振り返っていた。もっともこれは最近になって身についた習慣で、昔の僕なら考えもしないことだった。そして実際振り返ってみるとこれが案外悪くない。無論『今だから』という条件付きではあるものの、一日を振り返る行為は、以前の自分と比べ随分と日々を楽しく過ごせていることが実感できて、満ち足りていくような感覚だった。父さんが、最近僕の表情が明るくなったと言っていたけれど、よくよく考えればそれも頷ける。確かに、僕は以前の僕じゃない。

僕は魔法使い——いや、神さまだって羨むような力を手に入れたのだから。



次の日も僕はご機嫌だった。目覚めもよかったし、昨日みたいに朝から不良とぶつかることもなかった。その代わり今朝は倉瀬祭に出会うこともなかったけれど、こと朝に関しては出会わない方がよかった。彼女はおしゃべりだし、遅刻フラグはできるだけ避けたかったからだ。

学校に到着した僕は静かに窓の外を眺めた。グラウンドを見下ろすと朝練をしているサッカー部の人たちが元気にボールを蹴っている。彼らがいなくなったらグラウンドはただの空き地になってしまうんだろなああと、僕は意味もなくそんな事を考えていた。

「れーい」

朝礼の時間になり、日直の倉瀬祭の号令で皆が一斉に礼をする。彼女もやはり日直の雑用的な側面を嫌がっているのか、彼女の号令はだらりと肩の力が抜けるようだった。

先生はいつものように淡々と連絡事項を告げていく。まだ少し先の定期試験のこと。自転車通学の生徒が車との接触事故を起こしたこと。そしてやっぱり生活指導のこと。しかし先生は、それだけ言うと早々と職員室へ帰ってってしまう。

おかしいな、と僕は思う。先生は気づかなかったのかな？ いや、そんな筈はない。

うちの学校では朝礼の際の点呼は基本的でない。また各授業においてもそうで、大体は先生の目視による出席確認のみとなっている。……そうか。先生はぱっと見で欠席の生徒を把握したから、空席になっている生徒についてわざわざ僕たちに確認することをしなかったんだ。

そう理解すると、僕は机から一限目である国語の教科書を取り出した。すると、教科書と一緒に汚い筆跡で落書きされた一枚のプリントが落ちてきた。しかし奇妙なことに僕が書いたという記憶はない。結局誰のものかも分からなかったため、僕はそっと机の中に戻すことにする。

クラスの席は今日も半分が空席となっていた。僕は残りの半分の生徒の中に落書きをした犯人がいるのではないかと睨んだものの、残念ながら僕は探偵ではない。僕は犯人探しを諦めて、国語の先生が教室に来るのを静かに待つことにした。

落書きされたプリントには、血のように赤いマジックで「キエロ」と書かれていた。

...

昼休みになって、僕はいつものように弁当箱を開ける。色とりどりの野菜や肉料理が美味しうだった。弁当箱は二段式になっていたのもう一つの方を開けると、こちらはご飯が敷き詰められた上に海苔と醤油がかかった海苔弁当になっていた。

二つの弁当箱を机の上に並べると、僕は外を見ながら昼食を摂った。グラウンドには既に早弁を済ませたと思われる生徒たちが数名、制服姿でサッカーボールを追い回している。この日は天気あまりぱっとせず、空はどんよりとした曇天だ。だから気温はあまり高くはなかったものの、それでも制服で運動をするなんて僕には考えられなかった。だって制服で汗をかいたら、その後の授業はベタベタになった制服で過ごさなくてはならない。そのことを考えると、凄いなあと自分でもよく分からない感想が浮かんできた。

昼休みが半分を過ぎようとした頃には、既に半分になっていたクラスメイトの数は更にその半分くらいになっていた。けど、これは単純に皆が遊びに出かけたためだろう。

当然、日頃から活発な倉瀬祭もいなくなっていた。多分体育館でバレーボールでもしに行ったんだと思う。最近は女子の間でバレーボールが密かなブームとなっているらしく、彼女もその例にもれず、健康的な昼休みを過ごしているらしい。

僕は、クラスメイトの半分がいなくなったというのに皆よく暢気に遊んでいられるなあなど思いながら、窓の外を眺める。すると、僕が呆としていたためか、男子生徒が僕の後ろ頭に何かをぶつけてきた。大きさから推測して、恐らくバスケットボールだ。彼らはぎゃははと邪気を含んだような笑い方をしていたので、すぐに僕がばかにされているんだということに気がついた。

痛いなと思って振り返った時には、彼らは残らずいなくなっていた。

...

「れえー」

倉瀬祭の脱力感たっぷりの号令で、皆がだらりと頭を下げる。日直が違うだけでこうも礼に差が出るのかと、僕は新鮮な思いだった。

とうとう残り三分の一ほどになったクラスメイトがわらわらと帰宅していく中、珍しく倉瀬祭と一緒に帰ろうと声をかけてきた。特に断る理由がなかった僕は、彼女の提案に黙って頷く。

「それにしても今日のバレーは凄かったんだよ。あたし大活躍、みたいな。漆麻にも見せてやりたかったなあ。——ん、バレーって言ってもバレーの方じゃないからね？ バリーボーの方。漆麻は運動嫌だから、違い、分かるかなあ」

「知ってるよそのくらい。バレーはアン、ドウ、トロワってやつだろ？ 大体、祭がやるってことはバレーボールの方に決まってるじゃないか」

「む。それってどういう意味？ あたしにバレーは似合わないって言いたいの？」

「いや、そうは言ってないけど……」

やはり彼女はおしゃべりだなあと考えた。恐らく彼女が話しているのは体育ではなく昼休みのバレーボールのことで、自分のファインプレーのおかげで隣のクラスの女子に勝つことができたという趣旨の話だった。

「それでね、あたしたちが勝ったから明日からは一組が一番広く体育館を使えるんだよ。これって凄くない？ あ、でも男子は来ちゃダメだからね。男子は体育館に来たらバスケばかりだから、あたしたちが使えるスペースが少なくなるもの」

聞いてもないのに彼女は一人で話し続けた。一方の僕といえば、空模様などが気になって上の空だったと思う。……雨、降らないで欲しいなあ。

「聞いている？ あ、そうだ。明日は漆麻もおいでよ。一緒にバレーやろうよ」

「え、いいよ。だって男子は来ちゃダメなんだろ？ それに僕運動は苦手だし、周りが女の子ばかりの体育館に行くのは気まずいもの」

そう言って、僕はきっぱりと断った。昔ならよく強引に丸め込まれたものだが、今ではそうはいかない。僕だって男なんだから、いつまでも女の子に負けているようじゃダメだ。

彼女は露骨に不満そうな顔を見ると、今度はせめて応援だけでもしに来なよと言ってきた。

「なんでさ。他のクラスとの競争は終わったんだろ？ じゃあ僕は何を応援すればいいのさ」

「別に応援じゃなくてもいいよ。漆麻ってばいつも外見てぽかんとしてるから昼は暇でしょ？」

予期せぬ暇人のいわれに正直むっとしなかったわけではないが、実際その通りなので僕は何も言い返すことができない。

「ね？ じゃあ決まり。明日昼ご飯食べ終わってから見に来てよね。あたし、頑張るからさ」

だから一体何を頑張るんだらう。もうクラス対抗で試合をするわけでもないだらうに。

僕は空模様のこととあって、そのことについてはあまり深く考えず、単にプレーを頑張るんだらうなと思っておくことにした。

「じゃあ、あたしこっちだから。また明日会おうね。約束破っちゃ嫌だよ？」

「……うん。努力、する」

それじゃあ、と手を挙げると彼女は弾むような足取りで駆けていく。それを見て、僕も天気が崩れないうちに走って帰ろうかと思って、やめた。僕は走ることが嫌いだったからだ。

歩きながら、結局彼女の提案を呑むことになってしまったなあと反省する。そして、そのことがいつも姉さんに一番風呂を譲ってもらえない父さんの面影と重なってしまい、何とも変な気持ちになる。うちの男は情けないと、姉さんの呆れた声が聞こえてくるようだった。

家に帰ると、今日はリビングには母さんしかいなかった。姉さんは部屋で課題をやっているらしく、それを聞いて僕は少しだけ安心した。姉さんはもう三年生なんだから、年頃の話題にばかり振り回されていないでそろそろ真面目に勉強してくれないかと弟なりに心配だったのだ。

「あ、雨が降ってきた。漆麻が下校してる最中に降り出さなくてよかったわねえ」

相変わらずのんびりした口調で母さんが言った。僕もその通りだなと思った。

姉さんと違って今日は課題がなかった僕は、部屋に向かう前に母さんが座っていたソファの端の方に腰をおろした。母さんはやはり昨日の再放送ドラマが合わなかったらしく、今日はこれまた再放送の、交通警察の特集番組を見ていた。

「嫌ねえ、交通事故なんて。アンタも気をつけなさいよ。昔からぼけっとしてるから心配だわ」

「もう、祭みたいなこと言わないでよ。確かに人にはよくぶつけられるけど、車はそう簡単にぶつかったりしないよ。車なんてあんなに大きいんだから近くにきたら分かるし、第一ぶつけても損をするのは向こうじゃない」

「何言ってるの。車は近くにきてからじゃ遅いから注意しなさいって言ってるの」

確かに、と思ってからテレビに目をやる。車から見えていない死角に人が入り込んで起きた事故の解説をしているところだった。その死角のことをデッドスポット、ブラインドスポットとか言うらしいが、何でもかんでも横文字(カタカナ)にすればいいってものじゃないなあ僕は思った。

「それより祭ちゃんに会ったの？ 母さん最近は会ってないから久しぶりねえ。元気だった？」

それはもう全然元気ですよと、僕は、帰り道で彼女に散々聞かされたバレーボールの話をもつて母さんにした。懐かしそうに僕の話に耳を傾けてくれたので、僕は、少なくとも昨日の姉さんがしたドラマの話よりは母さんを楽しませることができただろうと、一人満足していた。

暫くすると姉さんがリビングにやってきた。姉さんはテーブル中央に鎮座していたリモコンを手を取ったかと思うと、有無も言わずにチャンネルを回す。そして最後に画面に定着したのは、昨日の再放送ドラマ。時間が昨日より遅かったためか、今はエンドロールが流れている。

「——ああ、やっぱり間に合わなかった。続きが気になったから見に来たのに、これじゃあかえって気になっちゃうわ」

「鞆華。アンタ勉強はどうしたの？」

「うーん、一旦休憩？ みたいな」

「またそんなこと言って。勉強した時間よりも休憩の方が長い勉強の仕方は、勉強とは言わないのよ？ せめてご飯の時間までは机に座ってなさいな」

「……ちえ」

言って、姉さんはそそくさと部屋に退散した。ただ去り際に、
「アンタも勉強しなくていいの？ 確か前の定期テスト、去年のわたしより成績悪かったよね」
そんな意地の悪い笑顔で姉さんが余計なことを言うから、
「……漆麻。アンタも父さんが帰るまで勉強でもしてなさい」
なんて、とばっちりをくらってしまった。



「それは、ほんのささやかな、祈りにも似た僕の願いだった、

毎年四月、クラス替えが発表される度、僕は「今年こそ明るくていい一年になる」といった希望を抱いたものだった。……もっとも、それは毎年の登校初日で裏切られてきたわけだけだ。

だから以前、父さんが僕に「沈んだような表情」と言っていたのは本当のことだった。確かに僕は、皆と違って今まで学校に楽しさを見出せないでいた。クラス替えがあったからといって、僕の毎日に何か劇的な変化が生まれるわけでもなく、また親密になれそうな友人と出会えたわけでもない。

僕は自分でも皮算用で終わると分かっているが、そんな期待を毎年のように抱き続けた。我ながら女々しいとは思っているけど、期待してしまうものは仕方がない。たとえ今まで報われたことのない期待でも、『今度こそ』と思う気持ちは、孵化を待つ動物が卵を温めている時の感情に近いのではないだろうか。……そしてその年も、例年通りクラス替えの時期がきた。

登校初日、皆はとてもきらきらしていた。女の子はおめかしとまではいかななくても綺麗に髪を結んでいたり、いい匂いの香水を振ったりしていた。男子も女子ほどではないけれど、普段よりいくらか目の輝きが違ったと思う。いつもよりビシッと決めた髪型。いつもより気さくに話しかける陽気さ。それはまるでバレンタインデー当日の、あの何とも言えない浮足立った感じによく似ていた。

そんな期待と不安が同居したふわふわと浮いたような教室の中、僕は一人で何も書かれていない黒板を見つめていた。黒板といってもよく見たら全然黒じゃないなあと、他愛もないことを考えていた。現在のように最後尾ではないものの、この時から窓際の席だった僕は、誰が閉めたかも分からない窓のカーテンに躊躇して、結局閉まったカーテンの向こうを見ることを諦め、黒板をじっと見ていることにしたのだ。

やがて先生がやってきて皆に自己紹介をした。眼鏡をかけた、知的で優しそうな若い女の先生だった。先生は最初に一人ずつ自己紹介をして欲しいと皆にお願いした。その時の仕草がとても柔らかくて女性的だったことを覚えている。

僕の出席番号は一番である蒼島(あおしま)さんの次——即ち出席番号二番だった。こんな時、あいうえお順の出席番号制度はどうかとつくづく思う。こっちには姓を選ぶ権利も拒否権もないのだから、それだけで何でもかんでも順番を決められるのは不公平だ……なんて思いつつも、それを口にする意味も勇気もない以上、不平は結局僕の心の中にしまわれることになるのだけれど。

蒼島さんの自己紹介は速やかに、何事もなく終わった。しかも彼女は明るい性格なのだろうか、自己紹介なのに冗談を言って、皆から拍手までもらっていた。

僕は、次が自分の番なのだと思うとギクリとした。

「——じゃあ次はうるうはらしづま君……でいいのかな？　お願いします」

「は、はい……」

ひどく、胸の動悸が激しかった。何だか息苦しいし、口の中もカラカラだ。体調が悪いわけでもないのに手足が震えてしまっているし、頭がカツと熱くなって焦点もうまく定まらない。

やっとの思いで立ち上がると、皆の視線が自分に集まっているのが分かった。それだけでも拷問じみているというのに、先生は何が楽しいのか、花のような笑顔で僕に言う。

「では、お願いしますねっ」

「……は、はい。え、と——う、うるはらしづま、です……。お、お願いしますっ」

自分は一体何をお願いするつもりだったのだろうか。そんな粋な突っ込みさえその時は浮かばず、僕は椅子取りゲームもかくやというスピードで椅子に腰を落とした。

「……えーっと、うるはら君……ですね。ごめんなさい、先生、漢字はあまり得意じゃないんだ。間違えちゃった」

照れたように言うと、先生はちろっと舌を出した。教師らしからぬ、子供じみた仕草だった。

それは先生の発言としてどうなんだろう。羞恥で俯いていた僕は、一瞬そんなことを考えた。確かに、僕の漢字はあまり名前に用いられる字じゃないから、本当は間違えても仕方ないんだ。

「せんせーい。漢字が苦手とか、先生がそんな事を言うのは教師としてどうかと思いまーす」

どこからか飛んできた野次めいた言葉にどっと教室が沸き上がる。僕は、自分と同じようなことを考えて笑いをとった誰かのことを思うと、胸がきゅっとした。

「それにいーウルハラなんて普通読めませんって。俺なんてジュンバラって読んじやったよー」

ぎゃははと雑音のような嗤いで教室が満たされていく。今のは一体、何が面白かったのだろう。僕にはよく分からない。

狂気のような哄笑の渦に、僕はひたすら気持ちの悪さだけを感じていた。加速していく嗤いは際限なく互いを追い越し、みるみる教室を侵食する。爆破された静寂からは奔流のような嗤いが吐き出され、しかし、恐らく爆心地だったであろう自分だけはまるで無風。凧と時化(しけ)の境界も分からずに、僕は大海を揺蕩う小舟になったような気持ちで、ことの成行きを窺っていた。

「——ふふふ。皆さん、あまり先生を笑わせないように。初日だっていうのに、教頭先生に怒られちゃうわ。……では皆で閨原君に拍手ー」

……………ぱち、ぱち、ぱち。

——あの日、ただ手と手を打ち合わせただけの音がまばらに聞こえていたのを覚えている。

初めの蒼島さんの時とは明らかに温度差が感じられたそれは、拍手と呼ぶには程遠い、耳を塞ぎたくなるような乾いた音だった。



この日も僕は上機嫌だった。しかも今朝はいつもより若干早めに登校したためか、昨日自分の机に落書きのプリントを入れたと思われる現行犯に出くわした。きっと彼らは僕がまだ登校してこないと踏んだのだろう。まさにこれから新しいプリントを机に入れるところだったという、あまりに間抜けた瞬間だ。彼らは僕を見るとギクリとした様子だったが、次の瞬間には開き直って、ヘラヘラと自分の席に戻っていく。これにはさすがの僕も腹が立ったが、すぐに彼らが消えてくれたため、怒りが爆発するということにはなかった。

昼休み、僕は弁当箱を空にすると体育館へ行こうかどうかを迷っていた。当の彼女はと言えば、やはり早弁でもしているのだろうか、昼休みになると駆け足で体育館に向かってしまった。……よし。

結局、僕は体育館へ行ってみることにした。最近疎遠になっていた彼女が珍しく僕を誘ってくれたのだし、あれでも幼馴染だ。断るのも不義理にすぎるだろう。それに、あと一年かそこらでお互い大学生になる。そうなってしまえば、物理的な距離だけでなく彼女にも新しい友人ができてしまうため、今まで以上に互いが遠ざかってしまう。

そのことを考えると、僕はやはり、彼女とは今のうちに仲良くするべきだろうと判断した。

空になった弁当箱を鞆にしまって、教室の扉を開ける。昼休みの喧騒に包まれた廊下は生徒たちの会話や笑い声で飽和しており、僕には少しだけ居心地が悪い。

昼休みの体育館は想像以上に賑やかな空間だった。様々な学年の男女や色々な球種のボールでゴった返している感じ。バスケットをしている男子もいれば隅の方で細々と談笑している女子もいる——そんな光景を見ていると、皆それぞれ有意義な昼休みというものを過ごしているようで、僕は普段の時間の使い方を改めるべきかと悩んでしまう。とはいえバスケットもバドも一人でやってもつまらないため、結局は窓から外を眺める自分の姿しか想像できないのだけれど。

バスケットボールやハンドボール、果ては小さなゴムボールのようなものまでが目まぐるしく飛び交っているその中に、僕はバレーボールに夢中になっている女子のグループを発見した。即興で用意したにしては立派すぎるコートの様子に、さては現在女子の体育はバレーボールが種目になっているのではないかと、この時気がついた。

昨日彼女が言っていた通り僕はあまりバレーについては詳しくなかったけれど、中でも一際よく動く女子を見つけた。その子がボールに触れるたびに仲間の女子が歓声を上げていたので、バレーの知識に乏しい僕でも、彼女が活躍しているのだろうということだけは理解できた。

「——祭ちゃん、トス！」

「オッケ！ 任せてっ——」

——彼女が、翔んだ。それは男子のように豪快な飛翔でなければ控え目な女子のように遠慮した跳躍でもない。コマ送りのようにさえ感じられたその光景に、僕は思わず息を呑んだ。

彼女の柔らかな筋肉の動きに淀みはなく、バネが弾けるその瞬間まで力を両脚に蓄える。

それは地を蹴ることを惜しむかのようで、しかし間もなく彼女は跳んだ。

その美しさ。まるで静止画像をコマ送りにして見せつけられているような。忘我の事実など今

や遙か認識の外側の出来事——この瞬間、"僕"というセカイは間違いなく消失してしまっていたことだろう。

彼女の四肢の動きに無駄はなく、かかる重力さえ存在感を喪失する。彼女を地に繋ぎ止める力はやがて姿勢を維持するためのものへと変質し、相対するベクトルを利用することで得たのは、美しいまでの安定性。

彼女は弓のようにしなやかに身体を反らせ、
そのまま中空で静止させておきたいくらい、
力強く——そして、曲線のような身体から高く伸びた腕を振り下ろした。

「————」

水を打ったように静まり返る一瞬。

僕の目を奪っていた彼女が体育館のフロアに舞い降りると同時に、同じコートに立った仲間から、割れんばかりの歓声が乱舞する。

彼女の名前は倉瀬祭——僕の、幼馴染の女の子だ。

...

彼女の活躍で一つの試合(ゲーム)の決着がついたのを見た後、僕はいつものように教室に戻って窓を眺めていた。しかし僕の目に映ったものは透き通るように青い空模様ではなく、窓に鏡のように映り込む自分自身の姿だった。

「……………ふう」

何度目かのため息。僕はどうしてこんなひどい顔をしているのだろう。彼女の活躍を見て元気をもらうことはあっても、こんな風に曇った表情をする理由なんてない筈なのに。

ため息は未だ打ち止めを知らない。ため息をつくとき幸せが逃げると言うけれど、もしも本当だったら、僕の幸福はとうに枯渇しているに違いなかった。

いつまでも面白味のない自分の顔を見ているのもばからしいので、僕は緩やかに流れる雲に視線を投げる。あんな風に流れるだけの生涯がどれほど楽だろうと思いを馳せる。行く手を遮る障害のない一生はなんて素敵だろうと、あてもない夢に慰めを求めた。

「——おーい、閨原あ」

ふと、誰かが僕の名前を呼んだ。珍しいなと思いつつ、僕は視線だけで返事をする。

「なあ、お前国語の教科書持ってねえ？ 持ってンだろ？ 俺忘れちゃってさ一貸してくれよ」

僕だって次は君と同じ国語の授業なんだけど——そのようなことを言うと、彼は、

「は？ いいじゃん別に。どうせお前だし。なあ貸せよ。落書きあっても我慢してやるからさ」

……どうして君がそんな事を知っている？

彼の言う通り、僕の教科書の殆どは落書きだらけだった。それも僕が書いたものじゃないからタチが悪い。大抵は以前僕が善意で貸してやった相手が落書きを残したものだったり、この間のプリントのように、いつの間にか落書きが増えているということもあった。

僕はとても嫌な気持ちになったので、彼の頼みを断ることにした。すると彼は舌打ちをして、

「ちっ、使えね一奴。お前になんか、こんな時ぐらいしか話しかけね一って……」

言い終わる前に、僕の視界から彼はいなくなってくれた。そのため今日も僕は怒ったり誰かと

ケンカをしたりということはしないで済んだ。

この日、クラスメイトの数はいよいよ十人程度になった。



「きっかけは、些細なことの積み重ねだったと思う、

.....びしゃり。

ふと、僕の頬に何かがかかった。それは当たった箇所から滑り落ちるように頬を伝ったため、僕は液体だろうかと予想する。そしてそれは正解だった。

手で拭くと赤い液体が僕の手の平についた。初めは血とも考えたけど、僕はどこも怪我をしていないし、血液にしてはやや粘度が低いようにも思えた。それに今は美術の時間だったことを思い出して、僕は自分の頬にかかった液体が絵の具を水で溶かしたものだとは結論した。

「ンだよ。全然つまんねーじゃん、アイツ。誰だよ、楽しいって言ったの」

僕が顔にかかった赤い絵の具をハンカチで拭いていると、誰かがそう言った。

これはいつの出来事だったろうか.....ともかく、これは僕がまだ`力、を持っていなかった頃の話だ。だから当時は、今ほど冷静に連中の悪意ある悪戯を許してやるほどの精神的余裕はなかった。だから僕は言ってやった。

——何するんだよ！

「.....ほら、つまんねー反応。何か冷めちまったぜ.....面倒くせーし、お前が責任とれよなー」
彼は僕など眼中に入らないというような態度で仲間に声をかける。

——おい、聞いているのか！？

「違う違う。まったく■■は優しいんだからー。もっとう筆をつけて.....と。

——こうするんだよ！！」

刹那、空間を薙ぐ一筋の軌跡。別の男子が握った美術の筆から光線めいた赤い斬撃が飛ぶ。

——びしゃり。

静まり返る美術室。先生は不在。先ほど画材を探しに行くと言ってまだ三分も経っていない。

そして、やがてそこはいつか見た嗤いの伏魔殿と化す。

「ぎゃははは！ な、な、面白いだろ？ あの服、まるで戦国時代の落ち武者みてーじゃね？」

服？ 指をさされて気がついた僕は、少し遅れて自らの着ていた制服を見た。そういえば、美術の時間はブレザーを脱いでいて上はワイシャツ一枚だったんだ。.....もっとも今となっては、あまり流行りそうもないパンクロックの柄のようなシャツに変わってしまったけれど。

僕の制服はまるで刀で袈裟斬りにされたみたいになっていた。彼らが`戦国時代の～、なんて比喻を出したのはそういうことなのだろう。斜め一文字に撒かれた線は、僕の左肩から右脇腹にかけてを切り裂いたかのように赤く染めていた。その様を見て、まるで本当に血が出たみたいだと思った。.....いや、もしも本当に「ココロ」なんてものがあつたとしたら、この時僕の「ココロ」は血塗れになっていたと思う。だとしたら、シャツに付着した擬似血液は、傷口から滲み出た僕の「ココロ」の出血を暗喩しているのではないだろうか。

美術は選択科目のため、音楽を選択している倉瀬祭がいなかったことだけが僕の救いだった。

彼女に情けない姿を見せずに済んだ——その事実だけが、僕の裂けかかった「ココロ」を繋ぎ止めてくれていたと思う。

哄笑は止まず、僕の胸には苛立ちと不快さだけが募る。そして……。

……そして、僕は彼らに何を思ったんだっけ？ 何を言ってしまったんだっけ？

思えばそれは、募り募った赤色の感情の発露だった。

僕が初めて、心から他人の「消滅」を祈願した、ある日の出来事——。



「.....ちょっと、危ない」

「ん.....」

僕は倉瀬祭に左腕を引かれ、進行方向を僅かにずらされた。まだ頭に鈍い痛みが残っているためか、僕の頭は何が「危ない」のかをよく理解していなかったものの、一応彼女の誘導に従って左に寄る。

校舎も茜色に染まる放課後、僕は保健室の正面で待っていた彼女と一緒に帰ることになった。「もう、しっかりしてよね。普段からぼーっとしてるから体育の最中に怪我なんてするんだよ」半ば——いや、殆ど呆れ果てたという口調で、彼女は僕の不注意さを咎める。

この日、僕は午後の体育の時間でちょっとした事故を起こしてしまったらしい。「らしい」なんて他人事のように言っているのは、その時の記憶が曖昧だったから。つまり僕が目を覚ますと保健室のベッドの上で、まるでマンガみたいなシチュエーションにこれでも驚いた方だった。

保健室の先生が言うには、体育でサッカーをしている最中に走ってきた男子生徒と正面衝突したというのが事の顛末で、幸い相手に怪我はなく、僕も頭に少しコブができた程度だった。

「——で、何だって正面衝突なのよ？ 漆麻、立ったまま昼寝でもしてたの？」

「それは.....分からないよ。覚えてないって言ったろ？」

そう。僕には一体何が原因だったのかさえはっきりせずにいる。先生は誰かと正面からぶつかったなんて言っていたけれど、僕はそれさえも今ひとつピンとこなかった。

こんなことって本当にあるのだろうか？ 今までになかった経験に、僕はもどかしいような苛立つような感覚を覚えた。

「ま、大事なさそうでよかったけど。本当に気をつけてよね？ ただでさえ最近『閨原君の様子がおかしい』なんて話をよく聞くんだから」

「え、そうかな？ ——ああ。父さんにも言われたけど、僕が笑うようになったから？ そのことだったら.....」

「そうじゃないよ。自覚ないの？ 閨原君は最近怖い、って皆が言ってるよ」

この言葉にはさすがの僕もむっとした。いくら幼馴染でも言っているいいことと悪いことがある。

「.....何それ？ 皆って誰さ？ それに怖いってどういう意味だよ」

思わず、平時と異なるような乱暴な口調になる。けれど、それを改めるつもりも必要性も、僕は感じなかった。だって、今回いけないのは明らかに向こうだ。確かに僕の不注意で勝手に怪我をして、こんな時間まで僕を待っていてくれた彼女には感謝もするし申し訳ないとも思う。でも、こんな時に人を傷つけるようなことを言うことはないだろう。

僕は、今まであまり向けたことのなかった種類の視線を彼女に向けた。

「じゃあ聞くけど。漆麻、どうして今までクラスの連中にいじめられてたことをあたしに内緒にしてたの？」

.....びっし。

耳の奥で、何かの壊れるような音がした。

それは例えるなら、薄氷に足を乗せた時のような。

「……何、それ。いじめって、誰が？ 僕は、そんなの知らないよ」

今の今まで強気だった自分の視線が、徐々に下がっていく。気づけば、僕たちはもう校舎の外にいた。灼けるような夕日が、目に沁みて痛い。

「——本当は言いたくなかったよ。漆麻が相談してくるまでは、女のあたしから言っていたこととはどうしても思えなかった。あたしがそのことに気づいたのは本当に最近だったんだ。一年の時はクラスが違ったし、二年で一緒のクラスになっても昔みたいに話すことはなかったから。……本当、どうかしてるよ。漆麻が相談してくれなきゃ、あたしからそんなこと聞ける筈ないじゃない……！」

彼女は目に涙をためながら言った。そして一瞬、僕も泣きたくなかった。今までこらえてきたものを、全部吐き出してしまいたくなかった。

——そう。少なくとも昔の自分なら、そこで彼女に慰めを求めていた。でも今は、決してそうはしない。そんな情けないことをしてたまるものか。

これは強がりなどではなく、純粹に僕に精神的余裕が生まれたことを表していた。だから今の僕には、彼女が悲しそうにしている理由が、正直よく分からない。

これ以上彼女を不安がらせないためにも、僕はできる限りの笑顔で言う。

「……何か、勘違いしてるんじゃない？ 僕は皆と上手くやれてるし、最近は学校も楽しいよ。確かにつまらないことをする奴はいるけど、僕は本当に気にしてない。祭は心配性だから……」

「……どうして？ どうしてそんなことをそんなに哀しい目で言うの！？ 本当は今にも泣きそうな顔をしてるくせに、どうしてあれだけされても笑ってるのよ！！」

「——あ」

「あたしを、もっと頼ってくれても……いいのに……」

一瞬、言葉に詰まる。彼女は間違いなく僕がクラスでいじめられているということを知っている。それをあえて知らないふりをしていたのは、僕なんかのちっぽけなプライドを気にかけてくれたことだったのだ。

何て、優しいのだろう。何で、僕なんかのことをそんなに気にかけてくれるのだろう……ああそうか。これは、"昔からの付き合い"というやつだ、きっと。成る程、そういうことなら幼馴染みというのも悪くない。

この時、僕は初めて自分の気持ちに純粹になれた気がした——僕は、ずっと昔から、彼女に恋していたんだ。

……ああ。けど、少しだけ惜しいかな。

「……漆麻？」

彼女は——倉瀬祭は、僕がもうそんな些細なことを気にする必要がないのを理解していない。

「……………」

彼女は僕が哀しい目をしていると言った——僕はそうは思わない。僕の瞳は以前よりも多くの感情(いろ)を映している。昔のように、諦観の果ての虚ろ(モノクロ)な世界を視ているわけじゃない。

彼女は僕が今にも泣きそうと言った——僕はそうは思わない。僕は毎日が楽しくて仕方ない。笑いこそすれ、泣く理由や必要性はどこにも見当たらない。もっとも、僕の「力」を知らない彼女からすれば、僕は哀れむべき被害者に映るだろう。しかし、それは間違った認識だったのだ。クラスメイトが日に日に「消滅」していくのを見ていないのだろうか？ いや、そんなはずはない。……そう、僕は神さまをも凌駕する力を手に入れたんだ。

"他人を意のままに消すことができる力"、を。

「……はは」

そのことを彼女に告げるのが楽しみで、今度は正真正銘心からの笑みが僕の口許を歪ませた。だって、彼女は今まで僕を「弱くて情けない被害者」という目で見ていたんだ。それはとても不本意なことだけど、ならばそれを覆した今の僕は、彼女の瞳(め)にどのように映るだろう？ 悪を倒す英雄？ 誰よりも強い無敵の勇者？ 逆境から這い上がった復讐者？ ……何でもいい。とにかく僕は、早く彼女に自分の手にした力の凄さを知って欲しくてたまらない思いだった。

ただ、彼女の言ったことは一つだけ当たっていたと思う。僕が笑っているということだ。父さんも言っていたけど、僕は本当に毎日が愉快で仕方ない。僕の意味一つで人間を消してしまえるなんて、これ以上の優越感がどこにあるだろう。それに、消す人間の選定は全て僕が行う。つまりこれは、神さまの役割を僕がやっているのと同じではないだろうか。

僕はもう昔の僕じゃない……理不尽な劣等感に苛まれてきた、底辺を這い回る弱者なんかじゃない……！

「し、漆麻……？」

「……………ごめんね」

改めて自覚すると、自分の心臓の鼓動が早くなっていくのが分かる。自分が興奮しているということが分かる。彼女が言っていた「最近の僕を皆が怖がっている」というのは、つまりはそういうことだったのだ。皆、今まで見下してきた僕に、仕返しされることを恐れている……。

「ごめん、祭……あのね。僕は」

昂る気持ちを抑えながら、彼女に全部を話した。

クラスメイトが消えた理由、それを他でもない僕が行っているという事実——その全てを、彼女には包み隠さず話してやった。そうすれば、きっと彼女も自分のことのように喜んでくれるに違いない。僕が手に入れた力がどれほど素晴らしいか、理解してくれるに違いないんだ。

そう思って、僕は今までの険悪な空気を吹き飛ばすほどの笑顔で、彼女に接した。

「だからね、祭。僕はもう大丈夫。大丈夫なんだ。ごめんね、もう何の心配も要らないよ、まつ……」

「——ッ！」

「あ……」

やはり、というか何というか……。

結局期待通りというわけにはいかず、僕が全てを話し終わると同時に、彼女は顔を青くして走

り去ってしまった。期待通りではなく予想通りという結果に、僕は少しだけ白けてしまう。

「……………」

でも僕はそれを残念に思うこともないし、咎めることもしない。だって、いきなりこんな話をされれば誰だって怖くなる。僕は今までとは違う。だから、もっと心にゆとりを持たなければいけない。

満足した僕は夕焼け空の下、一人帰路につく。

彼女に初めて告白した僕は、胸に残留する鼓動の早ささえ愛おしかった。



「人が人を物理的に消す方法は、実は凄く限られていると思う、

——僕は、人間を消してしまう力、を手に入れた。

人が人を跡形もなく消してしまう方法はどうしても限られてしまう。そこが問題だった。「人を消せ」と言われたら、同じ人間である僕たちには、およそ二つの手段しか考えつかないだろう。燃やすか、食べてしまうかだ。他に土に埋めて分解されるのを待つという手もあるが、骨までなくなるかどうか、僕は試したことがなかったし、第一もの凄く時間がかかりそうだ。

ならば、他に如何なる手段があるだろうか。僕の家は火葬場じゃないし、人一人を丸ごと平らげてしまうほど、僕はお腹が空いていない。

いつもの僕なら、そこで考えることを放棄していた。自分にできない手段なら、いくら考えを巡らせたところで無意味だ。だからその日も、僕はそこで考えることをやめる筈だった。

「消してしまえばいいんじゃないのかな——？」

ふと、自分に語りかける声があった。辺りを見回しても周囲は闇。しかしそれは是非もないことだ。……だって、ここは僕の夢の中。普段から映像としての夢をあまり見るのがなかった——もしくは僕がただ忘れていただけなのかもしれないけれど——僕は、代わりに暗闇に一人残された自分自身を俯瞰する夢を見るのがあった。

この時も僕は、一人で暗闇(ユメ)の中に取り残されていた。何をしていたかと聞かれたら、多分何もしていなかったと思う。だから僕は、今まで自分一人だったこの空間に初めて訪れた何者かの声に、静かに耳を澄ませてみる。

初めは不安だった。その存在が僕に危害を加えるという可能性もある。けれどそれ以上に、孤独から逃げ出せる嬉しさの方が大きくて、不思議と不安は安堵へと変わっていった。少なくとも、無人島でターザンに出会えた程度には安心したと思う。

「——消してしまえばいい。文字通り、二度と視ないで済むように。

キミが不安にならないよう、キミの目(キャンバス)に消しゴムをかけてしまえばいいんだ——、

頭の中の僕の声は、確かにそう言っていた。



次の日、倉瀬祭は学校を休んだ。無論僕が何かをした筈もなく、体調不良による欠席のようだった。そして先生はそれだけ告げると、いつものように淡々と連絡事項を述べていく。

僕はやはり、おかしいなと思った。クラスの生徒は現在全体の三分の一にも満たない。彼女が休んだ今、僕の両手の指でも数えられる程度の人数だ。普通なら学級閉鎖のレベルだし、事件になってもよさそうなほどだと思う。しかし先生はやはり普段通り。「それでは今日も一日頑張りましょう」なんて笑顔で言うと、さっさと教壇を降りてしまう。

僕は何だか気味が悪くなり、走って先生を追いかけた。普段の自分なら考えもしないような行動だったけれど、幸い先生はすぐに捉まえることができた。

「……せ、先生。今日休みなのは倉瀬さんだけなんですか？」

先生は目を丸くして、僕に言う。

「んん？ 先生はいつも休みの生徒は朝に確認してるでしょ？ 今日欠席の連絡があったのは倉瀬さんだけよ。珍しいよね、いつもあんなに元気なのに。……風邪でも引いたのかなあ」

それじゃあね、と先生はやはり笑顔で職員室に帰っていった。普段綺麗だった先生の笑顔も、この日の僕には貼り付けたような作り物の笑みにしか見えなかった。

「……どうして。どうして誰も何も言わないんだ？」

異状に気づかぬ誰もかも。一人だけ悪い夢にとり残されたかのようで、気分が悪い。

それから僕は、一日中吐き気を抑えることで精一杯だった。授業なんて頭に入る筈もなく、昼食も喉を通らなかった。口を固く結んで、喉の奥からせり上がるものをひたすら耐え続ける。時々口の中にじわりと変な味が広がったけど、我慢した。

目に映るのは空席ばかりの座席と、残り僅かになったクラスメイト。そして黒板といいながらその実黒色をしていない大きな板と、その上に教師が滑らせるいくつかの色をしたチョーク。…白色、黄色、赤色、イロイロ。窓の外には鈍色の空。今日の天気は曇り。黄色い太陽の陽射しはなく、空との距離がいつもより近い。それをずっと見つめていると湧いてくる衝動は、空が落ちてくるような、自分が空に堕ちていくような、そんな感覚と錯覚。

無意味に開かれた目はそこに映り込む映像の一切を僕に見せ続ける。でも、どれも僕が見たくて見ているわけじゃない。ただそこに在るから、僕の眼球が映像を捉えてしまうから、僕の脳がそれを「視、てしまう。取捨選択の自由はなく、誰にもそれを拒むことはできない。

不毛な憂えは、しかしその時ばかりは吐き気を紛らわすことができたため、この日の僕にずっとついて回った。……つまり、僕は結局一日中嘔吐感に付きまとわれていたというわけだ。

夕方のホームルーム前。授業を終えたとほぼ同時に、とうとう一桁になったクラスメイトの一人が僕を呼び止めた。あまりに気分が悪いものだから、僕は、「力、を手にしてから久しく忘れていた感情を思い出した。

胸にドロリとした何かが滾って、心の骨格を歪なものに変えてしまう、あの感情。

「ねえ閏原君、あたし今日日直なんだけど——」

……うるさい。だから何だって言うんだ。

「あ、怒ってる？まさかねえ、閨原君はいい人だからそんなこと——」

.....イイヒト、って何？ 文句も言わず黙って言うことを聞く奴をイイヒトって言うの？

「だからさあ、あたしの代わりに日直の仕事——」

だから？ 君の言うことに脈絡なんてどこにもないじゃないか。

「おい閨原あ、お前女の言うこと断ってんじゃ——」

君は誰だ。どうして今まで話したこともない人間が、今更僕に話しかけてくるんだ。どうして今まで僕に見向きもしなかったくせに僕を睨むんだ。睨むならちゃんと僕の目を見ろ。

——は、はは.....ははは.....！

.....遅かった。本当に、今更だ。

僕はようやく、教室(ここ)には初めから敵しかいなかったのだと理解した。彼女(まつり)もいないこんな場所に、僕を見てくれる人なんてどこにもいないのだ、と。

初めて本気で憎悪した、孤独という理不尽。初めて本気で絶望した、理不尽を強いる世界の規則。

"——ああ。世界は、こんなにも僕に優しくない"

まるで檻だ。世界、セカイが怖い。周りには、いつだって誰かの悪意がある。悪意の檻に、僕は身動きが取れなくなってしまうんだ。だったら.....

ダッたら。

「.....ろ」

「.....何だって？」

ダッたら。

「.....えろよ」

——ミンナ、キエテシマエ。

「.....あ？」

初めて僕が本気で切望したのは、消滅という解決だった。

「お前ら、全員消えちまえ！！」

「ッ——！？」

.....簡単なことだ。僕は`選定、なんて選り好みせずに、初めからこうしていればよかった。どうして今まで気がつかなかったんだろう。

容易い工程に笑いが出る。方法は至って単純(シンプル)で、今まで何度も踏んだ過程だ。

僕はただ望むだけでいい。そうすれば、あとは勝手に人が消える。銃やナイフで死に易い箇所を抉る必要はないし、消えることに痛みはないだろうから、罪悪感もずっと少ない。

「は——簡単じゃないか。そんなに僕を見たくなかったら、まずはお前らが消えればいい」

言って、自分の言葉にゾクリとした。誰もいなくなった無人の教室。皆音もなく消失し、残されたのは僕一人だ。

僕は少しの間、腹を抱えて笑っていた。狂ったように嗤っていた。どうせ誰も見ていないのだ

から、こんな時くらい狂人の気持ちというものを味わってみたかったのかもしれない。

気が済むまで笑ってから、僕は堂々と学校を後にした。初めて不良(ワル)になった気分にも一つ、胸が高鳴るのを覚えた。

...

もしも学校をサボったら、もっと不良らしいことをしよう——昔からそう思っていた。

いつも真面目くさった学生でいたのだから、どうせ悪いことをしたのならいっそ大胆なことをしてみたかったのだ。そして今まで眠り続けていた僕の悲願は、今日ようやく叶うらしい。

しかし現在は午後四時になる少し前。時計を見て、自分は本当にチンケな奴だなあと考えた。何故ならサボったのはホームルーム分の十数分だけで、実質授業にはフル出席なのだ。ホームルームだけボイコットなんてどんだけ勉強熱心なワルだよと、途中何度も独り言ちた。

そのうえ運のない僕は、「これからどこかに遊びに行こう。そうだ、不良らしくゲーセンなんてどうだろうか」などと散々ワクワクしたのち、突然降ってきた雨に出鼻を挫かれた。おかげでいらない傘まで買わされたし、そのうち雷まで鳴って、正直もう泣きたい。

トドメを刺された気分になった僕は逃げ帰るように家に帰った。まるでガキ大将にいじめられて泣きながら帰る子供のように、内心で自嘲する。勿論それを冗談と笑えるようになったのは僕の`力、のおかげで、もう誰かに虐げられることがないという余裕からだ。

帰った僕をいつものように母さんが迎えてくれた。姉さんは友達と図書館で勉強するという本当か嘘かも怪しい理由で遅くなるらしい。……ともあれ、僕は母さんのいつも通りの様子に少なからず優越感を感じていた。母さんは、僕が今日どれほど凄いことをしたかまるで気づいていない。いや、クラスメイトを全員消してしまったなんてどうして説明できるだろう。

母さんの反応に、僕もまたいつもの態度で接した。無闇に母さんを心配させるほど僕は親不幸ではないし、僕自身、自分の行いを秘匿することに多少の気分のよさを感じていた。「僕は誰でも消すことができるけど皆が怖がるから黙っているよ」という心境が、どこか神さまの余裕に近い気がして、とても心地がよかったのだ。

当然、父さんや鞆華姉さんにも普段通りの僕でいてあげることにした。



「……漆麻、アンタ今日も学校を休むつもり？」

「……うん。体調が、まだ良くないんだ」

扉越しに言うと、向こうからはため息が一つ返ったきり、スリッパの遠ざかる音だけがした。僕はあれから学校を休むことにした。クラスには誰もいないし、行っても仕方ないと思ったからだ。また、そのことが事件や事故としてニュースで取り上げられるということもなかった。

そのため、僕は自分の力について一つの仮説を得ていた。それは、`僕が消した人間は初めから存在していなかったことになるのではないか、というものだ。つまり、その人が存在していたという記憶や記録は、`消滅した、という事実をもって"上書き"されるのではないだろうか。

僕は現在、その仮説があながち間違っただけではないと考えている。そう考えれば、先生が出席に疑問を抱かなかったことも辻褃が合うし、警察が動かない現状にも納得がいく。

一応体調不良という理由のため、家から出られないことが不満といえば不満だった。最初は優しくかった父さんや母さんも日に日に嫌な顔をするようになったし、姉さんに至っては完全にひきこもり扱いだ。でも、いくら腹が立ったといっても身内を消すつもりは僕にはなかった。

それに、あの日以来会っていない倉瀬祭も僕は未来永劫消すつもりなんてなかった。改めて白状すると、僕は彼女に恋していたのだと思う。幼馴染に恋なんてどんな作り話(ドラマ)ですかと今まで鼻で笑ったものだが、その実、年齢が上がるにつれ僕は次第に彼女を意識するようになっていた。

大きな瞳と肩までの黒髪。幼さの残る小柄な身体。可憐とか清楚というより元気という方が似合っている少女の美しさ。反面、小さな頃一緒に走り回って生傷も絶えなかった彼女の手足は、今や見紛うことなき女性の肢体。そのアンバランスさに、僕はますます惹きつけられた。

彼女の学年が上がる度に得る新しい美貌を、僕は羽化する蝶を眺めるような気持ちで見守り続けた。高校生にもなる頃、美人というよりは可愛らしさの方面に成長していた彼女は、持ち前の明るさで男女問わず学年の人気者になっていた。当然そんな美少女のことを周りが放っておく筈もなく、彼女を取り巻く友人に人知れず嫉妬を覚えたこともあった。彼氏ができた、なんて噂を聞いた時には絶望で死にたくなかったほどだ。

幼馴染というのは思春期をきっかけに気まづくなったりするという話を聞くが、僕らもその例にもれず昔ほどの関係には戻れなかった。向こうは気にしていないのに僕だけが彼女に執着していたらみっともないし、何より、新しい環境に包まれている彼女に友人ができないことを吐露しているようで、ひどく情けないように思ったのだ。だから僕は自然と開いていく彼女との距離に抵抗しなかったし、それを彼女に気づかせるような真似もしなかった。何も気にしていない風を装って、自然と朽ちていく彼女との関係を感じながら、日々を生きていた。

だから、今こそ僕らは昔に還るべきではないだろうか？ クラスメイトは誰一人いなくなった。邪魔者はもうどこにもいないのだし、必要なら、学校の人間全員だって消してみせる。

そうと決まれば善は急げだ。僕はせっかくの早起きを無駄にしないよう、早速彼女の家に出かけることにした。寝間着を脱ぎ捨て、綺麗に折り畳まれた制服に徐々に袖を通す。アイロンの

かかったシャツはパリッと気持ちがよく、身が引き締まる思いだ。

「ちょっと出かけてくるよ」

支度を済ませると、僕は台所で食器洗いをしていた母さんに声をかけた。確か今日は平日だというのに、この時間になっても姉さんがいたことが不思議だった。

「ようやく学校に行く気になってくれたの!？」

ぱあっと明るくなった母さんの表情。しかし、僕はそんな母さんに冷静な事実だけを告げる。

「いいや、家の中ばかりだと息が詰まるからね。少し散歩してくるよ」

「——ちょっと、学校休んで散歩ですって？ アンタ何勝手なことばかり言ってるのよ？」

ダンとヒステリックにテーブルを叩いたかと思うと、姉さんは物凄い目で僕を睨みつけた。

「何怒ってるんだよ？ そういう鞆華こそ学校はどうしたんだ」

「誤魔化さないで。今は漆麻の話でしょ？ わたしの学校は創立記念日で休みなのだ。——さあ、アンタは平日から学校ズル休みして、一体どういうつもりなワケ？」

……うるさいなあ。そう思うと僕は思わずため息が出た。

「別にズルしてるわけじゃないよ。ちゃんと理由だってあるけど、鞆華には関係ないだろう？」

「関係あるわよ！ お母さんやお父さんがどれだけ心配してるか分かってるの!？ 今日で学校休んだの何日目？ アンタの勝手のせいで皆迷惑してるのよ!!」

「えーと……って、まだ五日かそこらじゃないか。そんなの、悪いことのうちにも入らないよ」

「な——アンタ、よくもそんな口を……」

「いいのよ、鞆華。漆麻にも考えがあるのよ。……漆麻、お昼ご飯までには帰ってきなさいね」

「お母さん!!」

フンと一つ鼻を鳴らすと、僕は姉さんがいたテーブルの前を横切る。

「待ちなさい！ まだ話は終わってないわ！」

「……しつこいなあ、姉さんは。母さんがいいって言ったじゃないか。姉さんは、もうどっかに行行ってよ」

——気づいた時には、もう遅かった。僕がはっとなって口を押さえた途端、姉さんはまるで消しゴムで攫(さら)われたかのように、目の前から`消滅、してしまっていた。関原鞆華という存在は、この瞬間から初めからいなかったものとして、"上書き"されてしまったのだ。

「あ、あああ……」

……違う。違う違うそういう意味じゃない——!!

結局いくら思い直しても、姉さんが現れることはなかった。……僕の力は明らかに強くなっている。力は以前より強力になっていて、僕の思いを過剰に解釈するようになってしまっていた。

……そんな、これじゃあ迂闊に想像することもできないじゃないか……!!

パニック寸前。恐慌一步手前まで追い詰められた僕は、すぎるような思いで母さんを見た。

「……か、母さん。鞆華が、姉さんが消え——え？」

……いない。さっきまで台所で食器を洗っていた母さんがどこにもいない。

「うそ……」

愚かなのは僕だった。つい先刻、想像さえ不自由になったと理解したばかりなのに。

僕は多分、母さんが消滅してしまう姿を想像してしまったんだ。無論そんなことを本気で望んだ筈もないし、今からだって撤回したい。けれど、僕の力はいくまで一方通行のようだった。

僕は理解する。僕は想像すらしてはいけないと知った筈なのに、その禁忌をいとも容易く破ってしまった。僕は、すれば母さんが消えると分かっているながら、ほんの試す程度の気持ちで、その姿(ユメ)を思って(ミテ)しまった。人間誰もが、禁止されたことに手を出したがるような気軽さで。

「っ——！！」

恐くなり、走って家から飛び出す。鍵も掛けずに逃げ出した。

「祭だ。彼女に助けてもらおう、

.....いや、そもそも一体何を何から助けてもらおうというのか。ともあれ普段なら考えられないほどの全力疾走で、彼女の家を目指した。黙っていても湧いて出る様々な雑念を、振り払うかのような思いで。

.....恐らくは既に父さんも消えてしまっている。走りながら、僕はそんなことを悟っていた。

...

彼女の家に来てきた。昔と同じで僕と同じの、中流家庭の普通の家だ。

僕は彼女が家にいると信じきっていた。クラスにはもう誰もいないのだし、彼女も僕と同じく、学校に行っても仕方がないと考えた筈だ。きっと家で寂しく思っているに違いない。

慣れない全力疾走で、僕は未だに肩で息をしていた。だるくなった腕をなんとか持ち上げ、震える指でインターフォンを押す。

一秒、二秒、三秒……。

「……………っ」

五秒、十秒、二十秒……。

……誰も、出なかった。家の周りをぐるりと眺めても、人がいる気配はない。小学校以来訪れていない祭の部屋にも明かりはなく、そしてその時、僕はあることに気がついた。

まず、僕はどうして彼女が家にいると信じていたのか。それは、クラスメイトが全員いなくなったから。彼女が学校に行く意味は、ないと思ったからだ。

では、倉瀬祭という彼女は一体誰なのか。勿論僕の大事な幼馴染であり、今は同じクラスメイトだ。

……そう。クラスメイトなのだ。ならば、クラスの全員が消滅したことを信じて疑わなかった僕は、無意識にクラスメイトと認識していた彼女さえも、消してしまったのではないだろうか。

ありえないことではなかった。僕の力は融通が利かないことを、僕は身をもって知ってしまっている。当然僕に彼女を消すつもりなんて毛頭ないし、この先においてもありえないだろう。けれど、もしも「クラスメイトが全員消えた、という思い込みの中に、無意識にせよ彼女が含まれていたとしたら……？」

「……………」

僕は、鏡があるわけでもないのに自分の顔が蒼白になっていく様子が見えた気がした。一気に血の気が引いていく感覚。たった思った程度のことで、僕はまず家族を失った。しかし、実はそれよりもずっと以前に、僕は彼女を失っていたのだとしたら。あの忌々しく下らない連中なんかと一緒に、僕は彼女をも消してしまったのだとしたら。

——僕のかつての境遇に涙してくれた彼女を。

——本当は僕が一人ぼっちなのを気にしてバレーに誘ってくれた彼女を。

——ずっと好きで好きで仕方なかった筈の彼女を。

……二度と、還ってこないのか。あの花のような笑顔は、二度と僕に微笑んでくれないのか。だとしたら、そんな世界に一体何の価値があるだろう……。

「……………ああ、そっか。もういないんだ、祭」

空っぽになったような僕の頭。それでも一つのことを思い出して、彼女の家から立ち去った。躊躇をしたりはしなかったし、あまりの潔さに自分でも少しだけ驚いた。

そうして、今度は街に出る。いつもなら買い物で賑わっている筈の街——でも、今は違う。

結果として、またしても僕の期待ではなく予想が的中した。期待と不安において、より実現し

やすいのは後者であるように、僕の不安は、期待を嘲笑うかのように現実を突きつける。

——いや、僕は初めからこの結果を知っていた筈だった。というより、本当に初めから気づくべきだったのだ。僕がこの力を手にした時から、結末は一つしかないということに。

なら、これはやはり期待通りと言い換えてもいいのかもしれない。これが現実であるというのなら、それは僕が望んだ願いのカタチに他ならないのだから。

——思った通り、街には誰もいなくなっていた。

そしてそれは、紛れもなく僕自身が望んだことの証だった。



"僕は——人類を、滅亡させてしまいました"

最初に商店街の家電販売店に行った。誰でもよかった。誰か、生きている人間を見たかったのだ。

そのためにはテレビを見るのが手っ取り早い。僕のせいで軒並み人間が消えてしまったが、テレビを見れば動いている誰かの姿を見ることが出来る筈だ——そう思っただけの行動だった。

その家電販売店は、普段から商店街を歩く人間が見られるよう配慮して、大型テレビの映像を垂れ流し続けていた。それで客を呼び込もうという魂胆なのだろうが、そんな見え見えの策に僕は今まで嵌まったことはない。だから、これをついに店の思惑に嵌まってしまうことになるわけだが、別にそれでも構わなかった。今はとにかく生きている人間を確認したかったのだ。

いつもなら何人が足を止めているテレビの前に、僕は一人で立ち止まる。時間的に、そろそろお昼のバラエティーが始まる頃だった。そして今はCMが流れている。

「あ——れ？」

そこで僕は、何かがおかしいことに気づく。

大きな液晶に次々と映されるのは、多種多様な商品の姿。酒。車。コーヒー。即席麺。また酒。家。音楽機器。携帯電話。風邪薬。デジタルカメラ。車。化粧品……………。

季節のように移り変わる様々な商品たち。その中には今まで何度も目にしたCMもあった。ただ以前と異なっていたのは、そこに映る物体の中に、人間が全く存在しないということだ。

「な、んで……？」

それは明らかにおかしなことだった。僕が消せるのはあくまで人間本体だ。テレビや写真など、一度記録された媒体が存在するのなら、僕にそれを消す力なんてない。この現状は、明らかに僕の把握している能力を逸脱している。

僕が記録を消せるのはあくまでその人が世界に存在していたという事実だけで、他の媒体に存在が残ってしまったものは消すことができない。とはいえ、それでも「その人」が存在していたという事実だけは、少なくとも消えてしまうのだから、結果それを見た人はその人が誰か分からず、不知のまま忘れ去られることになる……これが、僕の思っていた力のカラクリの筈だった。

では、一体この状況は何だというのだろうか……。

呆とテレビを眺めていると、間もなくお昼のバラエティー番組が始まった。タイトルが大きく表示され、やがて煌びやかに彩られたスタジオを映し出す。……が、どれだけ待っても人間がスタジオに登場することはない。顔のいい俳優も、面白い格好をした芸人も、スタイルのいい女優も、誰一人スタジオには存在せず、僕はひたすら無人のスタジオだけを見せられ続けた。

「っ、何で——！！」

僕は再び走り出した。目的は大きな鏡のある場所だった。世界に誰も存在しないというのなら

、せめて自分の姿を確認したい。僕が生きていることを確認したい。そんな思いだった。

ところが鏡屋なんて僕は知らず、仕方なく駅のトイレで我慢することにした。やはり誰もいない駅周辺と構内。誰もいないトイレの中は、たまにひとりでに水が流れて不気味だった。

入ってすぐの、横に大きい鏡を覗き込む。何度も何度も、目をこすって見直した。

——何度見直しても、映っているのは鏡の正面にある用具入れの扉だけだというのに。

「……は——はは、あはははははっ——！！」

笑いながらトイレを後にする。どこへ行けば人に会えるだろう？ ……いっそ狂ってしまえば楽だろうに、僕の頭には未だ泥のような理性が残留している。それが、かえって憎い。

僕は切符を買って改札を通った。ラッシュの時間はとうに過ぎてているが、それでも人に会えそうなのは電車が一番だろうと考えたためだった。でも、どうやらこんな時でも僕は犯罪に手を染める度胸さえないらしい。今や被害を受ける者もそれを裁く者もないというのに、僕は律義に切符を手にしていて。

不思議なことに、電車は定刻通り運行していた。また、思い返せば無人の街中にも車を何台か見かけたような気がする。中に人間が乗っていたかどうか、その時こそよく見ていなかったけれど、それはつまり、人がいなくても世界は日常を廻し続けているということなのだろうか？

時刻通りに到着したローカル線に乗車する。中は当然のように無人で、運転手さえいない。いつの間にか電車には自動操縦機能でもついたのである。ともあれ、今の僕にはどうでもいいことではある。人間がいなくても世界は廻るとか、僕を含めた全世界の人間が、本当は存在している筈の他人を認識できなくなったかもしれないとか、仮定の話はもうどうでもいい。

適当な席に座って流れゆく景色を眺める。空っぽの車内は僕一人だけなので、見るだけで憂鬱になってしまうからだ。それに、外を眺めていれば誰か人がいるかもしれないだろう？

そうして空っぽの車内(ハコ)の中、僕は誰が動かしているとも知れない電車に一人で揺られていた。その間も流れゆく景色は無人。駅で電車を待つ人も、誰かを見送る人もいない。本当に一人なのだと思い知らされた。……一人などと言いながら、そんな自分の身体も、今では存在すら危ぶむくらい不可視(とうめい)だというのに。

やがて遠くに山が見えた——あの山の向こうにも、きっと誰もいない。

やがて遠くに海が見えた——あの海の向こうにも、きっと誰もいない。

……そうだ。もうこの世界には何者もない。僕が認めた時点で、それは現実になる。そういう仕組みだ。しかも、どうやらそれは力の主体である僕自身も例外ではないらしい。

先ほど鏡で確認したけれど、やはり自分の姿はなかった。それも僕の場合意地の悪いことに、肉体が消えただけときた。現に僕の眼球は今も流れる外の景色を捉え続けているし、肺は呼吸を続け心臓だって動いている筈だ。だから僕がここにいるのは間違いないのに、どうやっても実体が見当たらず、それを自覚すると極度の心細さに襲われた。

どうして僕に限ってはこんな出来損ないの消滅の仕方だったのか、僕にも謎だった。もしかしたら他の人たちも僕と同じような状態になっているだけなのかもしれないけれど、確かめる術がない以上、誰にとっても無人の街であることに変わりはない。

静かに目を閉じる。ない筈の耳は電車の揺れる音を、ない筈の身体は電車の振動を知覚し続

ける。どうせなら、ない筈のこの瞼の裏側のように、何も見えなければいいのに。そう思った。

——ふと考えた。僕が望んだ世界とは、本当はどんなものだったのか。僕が初めに願ったことは、一体どんなものだったのか。僕の周りには、どんな人たちがいたのか。

しかし、いくら反芻してももう何も思い出すことはできなかった。あんなにも僕を懊悩させた人たちは、もうどこにもいないのだ。思い出そうとしても、ずっと他人(かれら)のことが嫌いだった僕には、彼らの面影も、声も、存在感も、何一つ記憶に残っていることはない。

父さんも、母さんも、姉さんも。……倉瀬祭という、幼馴染の女の子も。

あんなに好きだった人たちのことでさえ、今はもう思い出せない。どんな顔をして怒って、どんな顔をして泣いて、どんな顔をして笑うのか。消しゴムで攫った答えが消えてしまうように、僕ももう彼らのことは思い出せない。それを思うと、僕はひどく哀しい気持ちになった。

やがて、僕は自分の姿さえ思い出せないことに気がついた。けれどそれは当然だと納得した。

……僕は、究極のところ自分が一番嫌いだったんだ。

周囲から虐げられてもそれに抗う勇気すらなかった弱い自分が。

嫌なことがあっても気にしていない振りをして自分を騙し続けた醜い自分が。

倉瀬祭という幼馴染を終ぞ振り返らせることのできなかった閨原漆麻というちっぽけな自分が、どうしようもなく嫌いだったんだ——。

...

終点の駅に到着した。自動改札もない、小さな田舎の駅だ。

僕は切符を窓口に入れて、駅を出る。初めてきた場所だというのに、僕の見えない足は何かに従われるように歩き始めた。

歩いているうちに数台ほどの車とすれ違った。やはり中には誰も乗っていなかったが、不思議と怖いと思ったりはしなかった。

——ざざ……

やがて辿り着いたのは、海に見える海岸線。太陽の光で、きらきらと海が輝いて見える。

無人の車の交通量は、田舎だけあって少なかった。僕は、目の前を小さな黄色い車が通り過ぎたのを確認すると、次にしようと心に決めた。

車が見えなくなってから、また暫く暇になってしまう。僕はその間、久しく聞いていなかった波の音に耳を澄ませることにした。自分のいる場所からは少し遠かったけれど、寄せては返す潮騒が、僕の鼓膜を撫でるように震わせてくる。

何を思ったかと問われれば恐らく何も思っただけではなく、何を感じたかと問われれば恐らく何も感じてはいない。ただ、不可視の自分が世界に融けているみたいで、不意に泣きたくなるような居心地の良さを覚えた。

そしてようやく聞こえたのは、恐らく今度も誰も乗っていない車のエンジン音だ。

僕は波の音で穏やかになった心を連れて道路の真ん中まで移動した。無人か、もしくは透明のドライバーからすればそこに同じ透明の僕はいない筈。だから車はスピードを落とさないし、直前でハンドルをきったりもしないだろう。……そう、本当に唐突だけれど……僕は、ここで死んでみようと思うのだ。

僕は今、本当に生きているのだろうか……それだけが疑問だった。僕にはもう身近だった人の記憶がないし、自分の姿さえ見ることも思い出すこともできない。過去も未来も、自分が存在している裏付けさえ「消滅」した僕は、現在自分が生きているのかどうか、それだけが知りたかった。

遠かった車の音が徐々に近づいてくる。波の音はもう届かない。車は今度も黄色だった。当然ドライバーは不在で、中身のない箱は力強くコーナーを曲がるといよいよ僕に近づいてきた。

恐怖はあったものの、実体(カラダ)の見えない僕に痛覚は不要だと思えばそれは本当になると思っ(信じ)た。

……それに、僕はただ死ぬわけじゃない。この一瞬で、永らく疑問だった自分自身を見極めてみせる。

——恐らくは。僕は今、透明の眼球だけで浮遊しているのだ。丁度身体があった頃と同じ背丈分(百六十数センチ)の高さから、空っぽになった僕だけの世界を、一人観測し続けている。

五感は今も活きている。では、果たして僕は生きているだろうか？ 歩けば跳ね返る大地の

感触、電車の音や振動、潮風の匂い……それらを直接的に捉える世界との接点が、僕にはない。

ああ——だからこそ知覚する器官(カラダ)のない僕は、剥き出しの神経(ココロ)でそれを感じているのだろう。余計な情報(かんじょう)を交えることもなく、ありのままの世界の姿を、知ることができるのだろう。

生まれたての赤ん坊が、ただ世界に祝福されるように、今度は僕が、ありのままの世界を受容する……それは、何て純粋な世界との融和だろうか。

目覚め(死)は近い。実を言うと、少しだけ走馬燈とやらを期待したけれど、それも不発のようだ。

——願わくは、これが僕の身勝手な夢であって欲しかった。

どうやら走馬燈はデマだったが、死の間際に人の心が浄化されるというのは本当らしい。

後悔の尽きない、人生の意地の悪さ。僕は、初めてそれを心から笑うことができたと思う。勿論そこに嘲りはなく、単純に笑い飛ばしてやりたくなっただけのことだ。

「ああ——今、分かった。……バカなのは、僕だ。一人じゃダメだって、本当は分かってた……でも怖くて、誰かに拒絶されることは凄く怖くて……僕は、本当はずっと一番だった願いを棄てて、楽で傷つかない方に逃げてただけだ……」

……他人との接触は怖い。もしも拒絶されたなら、簡単には癒えない深い傷を負うから。

傷つくことを恐れた僕は、代わりに孤独という毒を受けた。ジリ貧は目に見えていたが、脱却する勇気が僕にはなかった。毒はじわじわと僕を蝕み、僕はそれに気づかない振りをした。

「……ずっと寂しかった……周囲に溶け込めない自分が、許せなかった。何だか、世界に自分がいてはいけないような気がして……」

自分にはあまりに分不相応な願いだと思った——だから僕は一番だった願いを棄てた。誰かと理解し合うという大切な願いを。……そうして他人に触れなければ、僕は永遠に傷つかないと思ったから。純粋だった子供の頃のように、世界(みんな)を、愛したままでいられる。そう思ったから。

しかし、結果としてそれはひどく歪だったと思う。成長すればサイズの合わなくなった服が着られないように、あの頃等身大だった僕の願いは今の僕には大きすぎた。

人は生まれた時以上の純粋さは持ち得ない。生まれ落ちる命がそれ以外を望まないように、多くを望みすぎた僕たちは既に混沌に近い。故に以前ほど純粋に人間を愛することができないし、傷つくことを恐れ、様々な感情や思惑といった不純物が堆積していく。それが人間だ。

だから、まずはそれを認めるところから始めればよかった。自分を知り、他人の混沌を知る。そうして初めて、僕は安心できると思うのだ。自分と同じ煩悶(カオス)を抱える、他人の人間らしさに。

人は常に純粋(エイエン)ではいられない。瞬間毎に形の変わる自分という器と上手く折り合いをつけて、僕たちは生きていかなければならない。そしてその在り方こそ、真っ当な人間の葛藤(じんせい)だ。

——目の前に迫る車の音。僕は、ようやく気づいた過ちに別れを告げる。思えば、これが僕にとっての走馬燈だったのかもしれない。……ああ。それならそれで、悪くない一瞬(ユメ)だった

。

「……あんなに嫌いだったのに——ああくそっ、どうして今更気づいちまうんだ。今じゃもう何もかも手遅れだっていうのに……」

見上げた天は高く、哀しいほど青く澄んでいる。一つきりの太陽は眩しく、同じく一人きりの僕を照らしている。

どちらも、空っぽになった箱庭には惜しいくらい輝いて見えていた。

◇epilogue◇

「——こんにちは。おばさん」

「あら！ 久しぶりねえ、わざわざ来てくれたの？ 元気だった？」

「はい。おばさんも、おかわりなく」

おばさんは以前と同じように自分に挨拶してくれた。嬉しい時に笑うとすうっと目が細くなって、普段の二割増しくらいいい人そうに見えるのも昔のままだった。

「ほんと、いつ以来かしらねー……っと、お母さん、わたし先に帰ってるね。留守番してるお父さんに『勉強しろー』って怒られちゃうから」

「そういえば鞆華お姉さんは今年受験生なんですね」

「そ。まったく嫌になるわ。あなたも一年後は覚悟しなさい。——じゃ、またね祭ちゃん」

自分とは違う高校の制服を身に纏っていた鞆華お姉さんに手を振る。久しぶりに見た彼女の制服姿は自分などより余程大人びていて、正直羨ましい。スラリと長い手足は同じ女の自分から見ても綺麗だと思えるほどで、だから彼は、日頃から女性を見る目が肥えてしまっているのではないかと、いらぬ邪推が頭に浮かぶ。もっとも、背中まで伸ばされた艶のある黒髪と、昔と同じアンニュイな雰囲気は、恐らく自分には真似できないので心配しても詮ないことではあるのだけれど。

そうして三人だけになった部屋で、わたしは用意された椅子に座り、おばさんと話をした。

「学校はどう？」

「ええ、楽しいですよ。……でも、やっぱりクラスの全員が揃わないのは寂しいです」

「そうね……本当に早く帰ってくるといいのにね、うちの漆麻は……」

言って、おばさんは悲しそうな顔をして傍にある白一色のベッドに顔を向ける。

——そこには、幼馴染だった男の子が、ベッドから半身を起こして窓を眺める姿があった。

関原漆麻。現在高校二年生で、同じクラスメイト。——そして、大切な幼馴染の男の子だ。

彼は今、原因不明の病により入院している。先日、彼が交通事故に遭って判明したことだ。医者が言うには視覚的運動盲に似た特異な病気で、外に出すのは危険なため入院が必要らしい。

彼には人間が見えていない。つまり、自分を含めた人間という存在を認識できないという奇病に侵されている。あえて名づけるのなら『人間盲』とでも言うのだろうか。しかもこの病のタチの悪いことは、人間にとって視覚が外部から取り入れる情報の大半を占めているように、その他の感覚までもが、人間を視認できない、という自覚に引きずられてしまうというものだった。

人がいないのだから触ってもそこはただの空間にすぎないし、人がいないのだから誰が話しかけても彼にとっては風の悪戯にすぎない——人間がいないという自覚が他の感覚にも作用し、結果、五感総てが、彼に人間を認識させないよう騙しているのだ。

幸い交通事故の怪我は普通の医療技術で治療が可能だが、こちらの障害については、残念ながら今は家族や友人の献身的な介護だけが頼りといった状態だ。

「……本当、早く帰ってこないかしらね……」

おばさんは何度もそう呟いていた。恐らくは無意識の独り言なのだろうが、そこにどれほどの祈りが込められていたかと思うと、胸が痛くなる。

「大丈夫ですよ。さっきお医者さんから聞きました。今は通常の視界と死角である視界が反転しているようなものだろうって。ほら、車と同じです。見やすい部分(フロントガラス)と見えにくい部分(デッドスポット)が今は逆になってるだけで……だから漆麻が少し注意深くあたしたちを覗き込めば、きっとすぐ元通りになると思うんです。——そうしたら漆麻驚きますよね？ 急にあたしたちが現れたように見えるんだから。……うん！ だからその驚き顔を見逃さないようにしましょう、おばさん」

「そうね。……そういえばその話なら前にテレビで見たわ。再放送だったけどね、学校から帰った漆麻とテレビを見たら死角がどうのって言ってたもの。だからその時も事故には気をつけなさいって言ったんだけど……。——それにしても祭ちゃん、例えるの上手ねえ」

「えへへ……」

本当は、病室に入る前にすれ違った医者が言っていたことだけれど、黙っていることにした。その方が褒められた手前嬉しかったし、それに、自分自身そうであると信じていたいのだ。

「あっ……」

今までぼんやりと窓を眺めていた彼は、ふと自分の座っている椅子に手を伸ばしてきた。恐らく彼には誰も座っていない椅子に見えているのだろう。少し恥ずかしかかったけど、やがて膝の上に置かれた彼の手に、わたしは黙って自分の手を重ねる。彼は表情こそ無表情なもの頬には細い涙の跡が伸び、だというのに、口許は僅かにほころんでいるような気がした。

……だからだろうか、彼の目覚めはそう遠くないのではないかと、根拠もなく思ってしまう。

こうして考えると、やはり自分は楽道家だなあとつくづく思う。けど、誰かを信じることはそれだけで前向きだ。だから元々楽道家の自分は、彼を待ち続けようと思うのだ。

思春期を経て、一旦は開いてしまった幼馴染との距離(かんけい)。これから先も続くとは誰にも言いきることはできないけれど、それでも今は、目の前にあるものを大事にしたい。今しかない今だからこそ、それを守りたいと願う心が生まれ、生きていくための原動力になる。

それはきっと、物凄く美しい"連続した一瞬(じんせい)"だと思うのだ——。



ふと思い出す。思い出すのは高校二年生の最初のホームルーム。僕の自己紹介は失敗に終わり、一つきりの乾いた拍手が教室の中に響く。

ふと思い出す。思い出すのは拍手の主。僕の席から右斜め後ろに座っていたのは僕の憧れの女の子。その席だけは、まるで静寂から切り取られたように華やかだった。

ゞ.....そうだ。あの時、たった一人で拍手を送ってくれたのは彼女(まつり)だったじゃないか——

つう、と涙が頬を伝った気がした。でも、それさえも不可視であったことが少しだけ寂しい。.....いや、もとより自分の泣いている顔なんて鏡もなしには見られないんだった——そのようなことを思い出すと何だかおかしくて、久々に笑えた気がした。

僕の目が見ることができるのは人がいたという痕跡だけだ。

病院のカーテンは朝に開いて夜に閉まる。食事はいつの間にか用意されいつの間にか下げられる。それに慣れてしまったのは、やはりこの温かさのせいだろうか.....。

ベッドの傍には椅子が二つ並んでいる。もしかしたら今も誰かが座っているのかもしれないけれど、勿論僕には見えないし、声も聞こえない。だから今は、病室に降り注ぐ柔らかな陽光のように、隣にある温もりだけを感じていようと思う。

——近くの椅子に手を伸ばす。窓から射す光に照らされたせい、椅子はぽかぽかと温かかった。

"——それは清廉清浄な伽藍の庭園。

そして、僕には広すぎた空の箱庭——"



空の箱庭～伽藍庭園～ Fin.

空の箱庭

<http://p.booklog.jp/book/29003>

著者 : night-e-gets

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/night-e-gets/profile>

ブックログID : <http://booklog.jp/users/night-e-gets>

Twitter : http://twitter.com/night_E_gets

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29003>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29003>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.